

マタイによる福音書5章1-16節 「幸いな者たち」

1A 八つの幸い 1-12

1B 山からの言葉 1-2

2B 自分に対して 3-6

3B 他者に対して 7-12

2A 世に対して 13-16

1B 地の塩 13

2B 世の光 14-16

本文

マタイによる福音書5章です。前半、1-16 節を読んでいきたいと思えます。(イエス様のこれらの言葉は、一節ずつじっくり取り組みたいので、いずれ、平日の聖書の学びか平日礼拝において、じっくり見ていきたいと思えます。)日曜の礼拝においては、その流れを見ていきたいと思えます。午前礼拝でも話しましたように、山上の垂訓にあるイエス様の宣言、神の国についての宣言は、聖書全体にある神のご計画の骨格になっているような言葉です。

1A 八つの幸い 1-12

1B 山からの言葉 1-2

1 その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。2 そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた。

初めに、「その群衆を見て」とあります。午前中にお話したように、イエス様は単に言葉だけで宣教を行なわれたのではなく、あらゆる病、あらゆるわずらいを癒され、痛みを苦しむ人、悪霊につかれた人、癩癩の人、中風の人なども癒され、それで大勢の群衆がイエス様についてきて途中で語り始められます。霊的な権威を行使して、それで事実、人々が現実の真ただ中にある生活でその力を見ることができ、それでイエス様の言葉を聞いたのです。福音というのは、単に言葉だけではない、哲学や信条ではない、事実、自分の生活のど真ん中に神の支配が広がる良い知らせであります。そしてイエス様の宣教の言葉は、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。(4:17)」でありました。これからイエス様は天の御国の中にいる者たちについてお語りになりますが、悔い改める者とは何なのか、それを八つの「幸いです」という言葉、「八福」と呼ばれますが、そこでイエス様はじっくりとお語りになります。

そして、「山に登られ」ていますね。ガリラヤ湖の周辺にある、どこかの山腹であります。明らかにイスラエルの民がシナイ山のところで、主から戒めを受け取ったことが意識されています。けれども、イエス様は「腰を下ろされ」て教えられます。これが当時のユダヤ教でラビが教えていた時の

姿です。そして、「弟子たち」が来ています。群衆が多くいますが、イエス様はご自分と生活しておられる彼らに教え始められました。群衆も聞くことはできましたが、飽くまでも弟子たちを教導くために語られています。私たちが、キリストの教えを聞いて、何か良いことがあると思って受身でいれば、それは群衆と同じ態度ですが、イエス様のように生きたい、この方を師と仰いで、この方に付いて行きたいというのであれば、弟子であります。生活をかけて、主が語られていることを行なっていく者たちです。そして、イエス様が「口を開き」、教え始められました。まさにことは、神からの言葉そのもの、天の御国の姿の宣言そのものです。

2B 自分に対して 3-6

3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」

午前礼拝でお話ししましたようで、福音の初めの初めは、「自分には全く何も良い物がない」という、絶対的な無力感、絶望感から始まります。「自分ではなく、キリスト」となる時、そこには神の御国が広がります。そうでない時に、それは「自分」が存在し、自分の国がありこそすれ、神が王となっている支配は広がりにません。悔い改めの実を結ばせなさいと、バプテスマのヨハネがパリサイ派とサドカイ派の宗教指導者に話しましたが、悔い改めを本当にすることができるかどうかは、その人がどれだけ自分を変えることができるかという頑張りではないのです。むしろ、自分が全く変えることはできないというところに、立ち続けていられるかどうか？であります。そこで、使徒パウロは手紙の中で、私たちが「罪に対して死んだ(ローマ 6:2)」と言っています。死んでいるのですから、何もすることができません。そうした、自分には何も良いものがない、力がない、知恵がない、何にもないというのが、ここで言っている「心の貧しさ」です。

そして、正確には「心」は「霊」であります。私たち心よりも、もっと本質的な部分、根幹部分で、自分は何もできないことを悟ります。そして「霊」というのは、神に関わる部分です。神がアダムを土の塵から体を造られ、そして鼻にご自分の息を吹きかけられ、彼は生きる魂となりました。ですから、神との関わりの中で、絶望感を味わうのです。霊の貧しさ、何も持っていないというのは、精神的に参ってしまっているということを表しません。感情的に痛めつけられるということでもありません。精神的に、感情的には参っていても、自分は神には頼らないという自負があるならば、心の貧しさは経験できません。飽くまでも、神の前にいる自分がもう終わりだと悟ることあります。ですから、午前礼拝でお話ししたように、霊の貧しさを味わうには、一言、「神を見る」ということに尽きます。この方の栄光、聖なる姿、偉大な姿、正しさ、この方の働き、語られる言葉、この方に触れられる時に、聖霊によって私たちは、圧倒的な罪深さを抱くのです。

そして、「天の御国はその人たちのものだからです」と言われていますが、イエス様はユダヤ人に対して語られているので、敢えて神の御名を使用せずに、天と言い換えておられます。そして、もう一つ、ユダヤ人の神の国の幻が、地に属しているようなものになってしまっていました。つまり、ローマを物理的に倒す政治的、軍事的なメシアを求めていたのです。しかし、神の国はこの世の

ものではありません。天に属するものです。天はこの地がたとえ過ぎ去っても、それでも神が王座に着いておられる所であります。私たちも同じです、御国の生活はとても具体的、実践的であります。神の国はキリストの再臨によってもたらされますが、しかし今から私たちの生活を通して既にあり、これから広がっていきます。しかし、その源は天そのものです。天におられる神ご自身から超自然的に、与えられます。「あなたがたはキリストとともによみがえらせられたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。(コロサイ 3:1)」

4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。

イエス様の、八つの幸いの言葉は、段階を踏んでいます。つまり、心が貧しさによる幸いが与えられたら、そこに自然と、悲しみも与えられるということです。同じように、悲しむ者であれば柔和さが与えられ、柔和な者に義への飢え渴きが与えられる、と続きます。ですから、霊に貧しさ、窮乏状態が与えられると、自ずと自分と言うものに対する悲しみ、罪に対する悲しみが与えられます。しかし、悲しみは悲しみで終わりません。むしろ、悲しみが訪れるとそれはそのまま、慰めになります。救われたという喜び、神の国の中に自分がいるのだという慰めになるのです。

イザヤ書 40 章は福音の始まりを告げていますが、1-2 節にこう書いてあります。「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」罪を悲しむ者には、このように罪の赦し、償いを二倍にして返していただけます。イエス様が、二人の祈りを対比されたことがあります、パリサイ人のそれと、取税人のそれです。取税人の祈りはこのようなものでした。「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』(ルカ 18:13)」彼は罪に対して悲しんだのです。そしてイエス様は付け加えて、「この人が、義と認められて家に帰りました。(14 節)」と言われました。慰めを受けたのです。ザアカイもそうでした。彼は取税人として、自分が人からだまし取っていたことを悲しみました。貧しい人を顧みなかったことを悲しみました。それで貧しい人に財産の半分を施し、だましとった者は四倍にして返すと言いました。イエス様は、「今日、救いがこの家に来ました。(ルカ 16:9)」と言われました。パウロは言いました、「神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせる(2コリント 7:10)」。

人間はしばしば、表面的には喜びや楽しみを装って、罪というものをそのままにして繕いの喜びを演じます。けれども、そんな喜びや楽しみは長続きしません。私たちの霊は、そこにある偽善、二心の中で苦しみ、悲しむでしょう。ですからヤコブが、このように私たちを叱責します。「嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。(ヤコブ 4:9-10)」罪があるのに笑えません、喜ぶことはできません。

そして、私たちは自分の罪への悲しみだけでなく、他の人たちの犯す罪にも悲しみが来るでしょう。他の人たちが罪を犯して、それで悲しまないというのであれば、御国の思いから離れています。エゼキエルが幻の中で、神殿で忌まわしい偶像礼拝を行なっている者たちの姿を見ましたが、そこで主は彼らに裁きを下そうとされています。けれども、神は御使いにこう命じます。「都の中、エルサレムの中を行き巡り、ここで行われているすべての忌み嫌うべきことを嘆き悲しんでいる人々の額に、しるしをつけよ。(10:4)」額に印を付けられた人はその裁きを免れますが、それはこれら忌み嫌うべきことを見聞きして、嘆き悲しんでいたからです。そして、イエス様が罪を負われる方として、イザヤによれば「悲しみの人」でありました。「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。(53:3)」イエス様は罪に伴う悲しみをご自分の身に負われました。

5 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。

私たちは、霊の窮乏状態が与えられ、それから罪に対する悲しみが与えられれば、次に、「柔和」さが与えられます。ここで言っている柔和は、いわゆる性格上の優しさのことではありません。静かにして、優しくしていることと無関係です。自分の至らなさ、つまらなさを知ったら、人からそのことを言われたとしても、怒り、仕返しをするようなことはしない、ということです。悲しむ者が、もっぱら神との関係の中でのことであるのに対して、柔和さは人との関係の中でも、そのへりくだりを保っている状態です。

普通に考えて、「地を受け継ぐ」ためにはどうすればよいか考えてみましょう。自分の支配領域を増やすため、自分が自由にふるまえる空間を増やすためにはどうしますか？力を行使します。相手と駆け引きをします。自分の弱みは決して見せません。自己防衛をします。自分の領域を自分の力で守ろうとします。そのように、自分の周りに壁を作ることによって、何とかして自分の領域を残そうとします。しかし、イエス様はその正反対の姿勢のほうが、かえって地を受け継ぐのだと言われているのです。

興味深いことに、「柔和」というギリシヤ語の反対語は、「復讐」なのだそうです。そこで、私たちが思い出すのは、ダビデです。彼は、イスラエルの国を治めるようになりました。支配しました。しかし、力で奪い取ることはしませんでした。むしろ殺されそうになっていたのに、反撃しないで、主に裁きを任せていきました。エン・ゲディという、死海のほとりにある、洞窟の多いところに隠れていました。するとたまたま、サウルが自分たちの隠れているところに入ってきて、そこで休んでいたのです。部下は彼にこう言ったのです。「今こそ、主があなたに、『見よ。わたしはあなたの敵をあなたの手へ渡す。彼をあなたのよいと思うようにせよ。』と言われた、その時です。(1サムエル 24:4)」自分たちの洞窟にサウルがはいつて来たのですから、それこそ神の導きだと誰でも思うでしょう。けれども、ダビデは部下の言葉に影響されて、彼の上着のすそを、こっそり切りました。けれども、それだけで彼の心は痛みました。それだけ自分の手で裁きを与えることに、神の主権に侵害したと思ったのです。ダビデは、主の前にある自分を忘れていませんでした。神の恵みによっ

て、自分が立っていることを忘れていませんでした。だから力を行使しなかったのです。

そして何よりも、イエス様ご自身が柔和であられました。神の身分であるのも関わらず、罪深き人の姿と似たようになられ、罪人たちの反抗を忍ばれました。ご自分は父なる神の命じられること以外は何も行われませんでした。そこに柔和さがあります。そして、私たちに教えられます。「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。(マタイ 11:29)」

そして最終的に、主がそのような人々に地を受け継がせ、神の国を受け継がせます。パウロがテモテも教えました。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。(2テモテ 2:11)」キリストと共に王となるのですが、それには耐え忍ぶということが必要です。反抗する人、反対する人、不都合なこと、いろいろなことが起こっても、それでも耐え忍びます。主がその人を引き上げてくださいます。主が父なる神からすべてを任せられたように、キリストにあつて御国を任せられるのです。

6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。

心の貧しさがあれば、罪に悲しむようになり、悲しめば、そこにはへりくだり、柔和さが生まれます。ここまでは、自分自身を見つめる態度であります。そして次に、「義に飢え渴く」ことに入ります。ここでようやく、神に向かって飢え渴いています。神の義を追い求めています。なぜなら、義というのが神ご自身から来る賜物であつて、自分自身のものではないことをよく知っているからです。パウロが次のように、表現しました。「キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えらる義を持つのです。(ピリピ 3:9)」

この世は、義を求めますが、いつもそこは自分を差し置いています。自分が正しいという前提があります。けれども、その自分自身が最も危ういことに気づいていません。イエス様は、自分たちが正しいとみなすパリサイ派によって迫害され、十字架に付けられました。自分たちが妬みと殺意に満たされていたことに、気づいていなかったのです。しかし罪を悔いて、悲しんでいる者には、罪に赦し、慰めが与えられ、そして信仰によって義とみなされます。自分は罪深いのですが、神の一方的な恵みによって義とみなされているのです。ですから既に救われています。しかし、自分自身にその義が与えられることを強く願います。自分が罪ある姿のままであることを願いません。罪を捨て、罪から離れ、罪から自由にされることを強く願います。そして、神から義が与えられることを願い求めるのです。すでに救われたのですが、救いの完成を願って慕い求めます。聖霊を求め、今もキリストの似姿になることを願っています。

「飢え渴く」と言っていますが、私たちが水を欲する、また空気を欲するその欲求は、とてつもなく

大きいものです。切実です。そのように、絶えず自分自身はキリストと共に十字架に付けられていますが、キリストが自分の内に生きてくださることを願っています。息をするように願っています。ダビデが歌いました。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ、私のたましいはあなたを慕いあえぎます。(詩篇 42:1)」

そして約束は、「満ち足りる」であります。ダビデが歌いました、「しかし私は、義のうちに御顔を仰ぎ見、目覚めるとき、御姿に満ち足りるでしょう。(詩篇 17:15)」義とされた自分が御顔を仰ぎ見ます。そして、御姿に満ち足ります。自分自身が復活する時に実現しますし、私たちは聖霊の力によって、その満ち足りた姿へと少しずつ変えられることによって、今もその幸いにあずかることができます。パウロはテモテに教えました、「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそが、大きな利益を得る道です。(1テモテ 6:6)」間違っても、自分の義に満ち足りてはいけません。パリサイ人の祈りは、自分の義に満ち足りた人でした。「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を捧げております。(ルカ 18:11)」主が、賜物として私たちに満たしてくださるのです。

3B 他者に対して 7-12

このようにして、自分自身に対する至らなさを知る人が幸いであり、また神ご自身に義を求め、飢え渴いている人は幸いです。そして次から、他者に対する自分たちの態度に移ります。ですから、天の御国の福音とは、いつも自分から始まります。自分の心の一新から始まり、そして神の義へと移り、そして他者に対する働きかけなのです。多くの人が、他の人たちを何とかしようとしています。しかし、ここには順番があるのです。

7 あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。

義に飢え渴く者が、どのようにして憐れみ深くなるのでしょうか？正しさを求めているのだから、しかるべき裁きを受けなければいけないのでは？義憤に燃えるべきでは？となるでしょう。しかし、ここで先週、天に召されたビリー・グラハムの言った言葉を思い出します。「裁きは神の行なわれること。私の務めは愛することだ。」そうです、義も裁きも神ご自身のものであることを知っているがゆえに、神を恐れ、それゆえ自分の弱さを知って、相手を憐れみ、その人の弱さに同情し、必要ならばその状況に対して具体的に助け手を差し伸べることであります。イエス様は後で、「裁いてはいけない」ことを教えられます。「さばいてはいけません。さばかれたいからです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。(7:1-2)」神の義を求めると、裁きというのが神の領域にあることを知るようになります。命を与えるのも取るのも神のみが行ないますが、もしそれを人が行なったら殺人です。それは神の領域に侵害したことに他なりません。同じように、裁きや復讐も神に属しています。これに手を触れることは神の領域に同じように侵害しているのです。

イエス様が、憐れみ深い方でした。「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル 4:15-16)」そして、裁きについても、十字架における人々の不正については神に任せておられました。十字架上で、彼らを罵ることなく、むしろ罪を赦してください、何をしているのか分からないと祈られました。

憐れみは、具体的な行動をしばしば伴います。言葉だけの同情ではなく、実際に助けの手を差し伸べます。それが、あの有名な良きサマリヤ人の話です。半殺しにされていた人を、サマリヤ人が手当てをし、宿に泊まらせ、その宿代まで支払いました。そういった具体的な行為にまで及ぶことを主は願われています。

そして約束が、「その人たちはあわれみを受ける」であります。チャック・スミスはしばしば、こんなことを言っていました。「私は間違いを犯すなら、憐れみのほうで過ちを犯したい。人を誤って裁くのではなく、人を誤って赦すことを選びたい。」誰かが罪を犯して悔い改めた時に、その悔い改めか真実なものかどうか完全に分からなくても、憐れみを示すことを選ぶということです。ビリー・グラハムもそのような人でした。彼の福音メッセージは、全く妥協のないものでした。罪をはっきりと告げました。神の裁きをはっきりと告げました。けれども、例えば罪を犯し、犯罪も犯したテレビ伝道者のところに、その刑務所のところに面会に行きました。そして、「愛しているよ」と言って抱擁したのです。彼が釈放された後も、その隣にビリーの奥様が座りました。こうしたことで非難を受けました。けれども、憐れ深い者は幸いです、そうすれば自分も憐れみを受けるのです。

ここで、一見、憐れみを示すことによって憐れみを受けるといふ、行ないによる救いのように聞こえるかもしれませんが。主の祈りでもそうですね、自分が罪を赦したから、私たちの罪も赦してくださいと祈りなさいとあります。とても大切な点です。これは救いの条件を教えているではありません、こう言い換えたらいいいでしょう、「神の憐れみの中にいる者は、憐れまないということができなくなる」ということです。プールの水の中で潜水している人が、水の外にいて呼吸をするようには呼吸できないのと同じです。神の憐れみを知っているなら、憐れみの御霊の中にいるので、人に憐れみを示さないということとはできません。憐れみを示す中で、神の憐れみも受けています。

8 心のきよい人は幸いです。その人たちは神を見るからです。

私たちが神の憐れみを求め、また人に憐れみを示していくその中で、その行為以上に、自分の心のきよさが試されます。例えば、誰かの過ちを見る時に、それに関わらないとすることが果たして本人にとって良いことでしょうか？何もしないというところに、実は「自分が厄介なことに関わりたくない」という不純な動機が入っているかもしれません。そのように、心を清く保っておくことこそが、

神の御霊の流れを妨げることがありません。また、慈善行為でもそうでしょう、良きサマリヤ人にならって憐れみの行ないをしていても、もしそれが自己満足の領域を超えないなら、御心を損ないます。私たちの良い行いは、マタイ 25 章にあるように、飽くまでもイエス・キリストご自身に対して行なっているところに意味があります。どんな小さな者にも、イエス様に対してしているように行なう、そこに心の清さがあります。

ですから、そこで「その人たちは神を見る」という約束があります。神を私たちは見たいですね。もちろん物理的に見るわけではありませんが、霊的に神がおられることを知ることができます。これは、心の清さがあってこそ、見るができるものです。「すべての人との平和を追い求め、また、聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることができません。だれでも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。(ヘブル 12:14-15)」ここでは、次の平和を造る者に関わりますが、平和を追い求めるその心、また苦い根を注意する心、それを保っていれば神を見ることができます。これはちょうど、メガネをかけるようなものでしょう。心の清さという度数の入ったメガネによって、神の国、天の御国がどのようなものか見えて来るということです。

9 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。

神の義を知り、次に神の聖さを知り、その次に神の平和を知ることができます。イザヤ書には、神の御国の福音が、平和の福音であることを教えています。「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる。」とシオンに言う者の足は。」バビロンによって踏み荒らされたエルサレムですが、王なるキリストが来られることによって救いが与えられ、平和が与えられます。私たちがこの方を主として生き、神の義を求め、心を清く保っている時に、そこに広がるのは神の平和です。そして、イエス様のこの言葉を聞いていた群衆は驚いたことでしょう。ローマに対して武器を取ってでも打倒することこそが、御心だと思っていたからです。けれども、イエス様は決してそれをなさらなかった。ローマに対して反抗することはなされず、かつ神にも仕えることを教えられました。カエサルのものはカエサルに返しなさい、ということです。

ところで、私たちは信仰によって、神から義と認められます。そして、神との平和を持つことができます(ローマ 5:1)。神が私たちの罪によって私たちに敵対することがなくなったからです。そして、神との平和は神の平和につながります。私たちの心が、自分の理解を超えたところの神の平和で守られるのです。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。(ピリピ 4:6-7)」そして、人との平和につながります。「あなたがたは、自分の関する限り、すべての人と平和を保ちなさい(ローマ 12:18)」ここでは、この人との平和の話をしています。

ここで大事なのは、「平和」というのは「造る」ものなのだということです。何も関わらない、いざこざが起こらないのは平和ではありません。むしろ、神がキリストを遣わし、人との間の架け橋を造られたように、具体的な行為であり、対立する人々の間に交わりと和解が造られていくことです。具体的に行動に移すことによって、人々が一つにされていく、愛によって結ばれていく時に、このイエス様の言葉が実現します。神との和解を果たした私たちの間に、キリストが一致を与えてくださり、それでキリストの体が建て上げられていきます。初めは、ペテロに神が働きかけ、幻の中で天からの風呂敷を見せて、そして神に祈っているローマの百人隊長コルネリオと会わせました。それから、異邦人とユダヤ人は決して混じり合わなかったのに、その時から福音によって交わりを始めました。それでも乗り越えるべき課題がたくさんあり、割礼を受けていなくても救われるということ、ユダヤ人が受け入れるのは、とても苦しいことでしたが、しかし心を神が清めてくださるのだという啓示が与えられて、その啓示に従ったのです。このような忍耐と努力が必要だったのです。

そして、「神の子どもと呼ばれる」という約束があります。神の御国において、その相続者が神の子どもです。神の息子と言ってよいです。御国には平和の実が満ちていますが、ゆえに、そこを相続するのにふさわしい王子たちという意味合いです。

10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。

非常に興味深いです。心の貧しさから始まりました。天の御国は、心の貧しい者のものでした。最後は義のために迫害される者ですが、天の御国で終わります。つまり、この八つの「幸いです」はこの地上における天の御国の到来を表しているのです。そして主イエスが来られて、天の御国が地上に迫り、その中に入ってくる人たちがこのようにいます。コロサイ書では、この移行をパウロがこう話しています。「神は、私たちが暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。(コロサイ 1:13)」そうすることによって、世との摩擦が生じます。新しい国が既存の国に入りこんできたのです。そこでの地に属する人々の反応が「迫害」です。

そしてもう一つ興味深いのは、平和を造る者は幸いですと主は言われながら、義のための迫害される、ということは大きな対立があるのではないかと、ということです。イエス様はマタイ 10 章でこう言われています。「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。(マタイ 10:34)」この後にイエス様は、家族があなたがたの敵になるという言葉を残されています。私たちは、「真の平和とは何か」をここで考えないといけません。それは平和の神が支配される領域です。神を神として、神が王、主権者として認める時に平和が来ます。ですから、自分だけでなく、家族もイエスを自分の主として信じ、服従することによって初めて、真実な平和が訪れます。ですから、家族がイエス様に自分の人生を明け渡さなかったら、自分が憎まれているのではなく、イエス様ご自身に反発するため、イエス様に従う者に害を加えるのです。「人々がわたしを迫害したのであれば、あ

あなたがたも迫害します。(ヨハネ 15:20)」

ここで、迫害されるのは「義」のためです。そしてイエス様はそれが、11 節で「わたしのため」と言われています。イエス・キリストの十字架を受け入れるということは、神の義を受け入れることです。十字架を受け入れるということは、「あなたがたがどうしようもなく、救いようもなく、何ら自分のうちには善いものがない、霊的な乞食だ。」ということを確認することです。けれども、世に属する人々はそれを嫌います。表面的に行ないを改めることは良しとしても、このような革命的な、過激な心の変革は望みません。そのために迫害します。

11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから、あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。

ここで主語が変わっています。それまでは、「心の貧しい者」など、そこは三人称になっていました。英語で言えば they です。けれどもここから二人称に変わります。「あなたがたは」になっています。つまり、これまでは群集を含めた一般的な宣言をしていましたが、今は、手前にいる弟子たちに目を向けてそれで語っておられます。イエス様に付いて行くということは、イエス様が迫害されたように、迫害されるということです。そして、イエス様が注目しておられるのは、「ののしり」「悪口」です。つまり口による中傷です。ダビデも詩篇の中で主に叫び求めているその多くが、口による攻撃です。主ご自身が、ユダヤ人から、悪霊で悪霊を追い出していると言われ、また不貞で生まれた子とも呼ばれ、ユダヤ人裁判においては、神殿を壊すと宣言したと言われ、そしてカイザルに背くようにユダヤ人の王と言ったと言われました。

けれども、イエス様は、「喜びなさい。喜びおどきなさい。」と言われました。ヤコブも、「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。(1:2)」と言いました。使徒の働きで、使徒たちが確かに喜んでいる姿が描かれています。「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。(使徒 5:41)」そして、「天においてあなたがたの報いは大きい」と主は言われます。単に天の御国に入るのではなく、大きな報いをもって入ります。イエス様は、迫害という辛く、苦しみのあるところで、それは自分が悪いことをしたからということではなく、ご自分のゆえに苦しむのだから、良いことなのだということを教え、慰めたかったのです。

そして興味深いのは、「あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害した」とありますが、誰が迫害したのでしょうか？ そう同じユダヤ人でした。王たちであり、その王の片棒を担いだ祭司たちが急先鋒になって、迫害しました。エレミヤを迫害したのは祭司たちです。そしてイエス様を迫害するのも、宗教指導者です。世の価値観を共有してしまっている宗教が、迫害をします。世的になっている教会やキリスト教の団体が、主に従おうとする人々を迫害することが多いです。

2A 世に対して 13-16

これで、八つの幸いについて読みました。迫害を受けるというところから、そうした中でも、世に対して強い影響力を持てるということをイエス様は語られます。迫害を受ければ、それだけ影響力が弱くなると考えるでしょう。しかし、そうではないのです。追い風があるからかえって前進するヨットを見てください。全く同じように、迫害や反対があると、その中で世に対して証しを立てていくことができるのです。

1B 地の塩 13

13 あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。

地に対しては、あなたがたは塩であると宣言されています。塩には二つの効果があります。一つは、渴きを引き起こすことです。ポテトチップスにはたくさんの塩が付いていますが、それはわざと他のジュースを買ってほしいためだと聞いたことがあります。キリスト者がこの地上にいることによって、周りの人たちはまったく違う国がそこに存在しているのではないか、と思うのです。突っ切っている、と言ったらよいでしょうか、自分たちが地に属している者であることを感じ取ります。何かが違う、それは何なのだろうと思ひ、もしかしたら本人もキリストを探してみようか、と願うようになります。

次の塩の効果は「防腐剤」です。塩をまぶすことによって、肉など腐敗の進度を遅らせることができます。地に属する人々が、キリスト者を見て渴きを抱くだけでなく、自分の願っている悪を完全な形で行なうことのできない力を受けます。神の憐れみによって、この世が完全な形で悪に陥ることがないように作用します。テサロニケ人への手紙第二 2 章で、「不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分を取り除かれる時まで引き止めているのです。(7 節)」とあります。反キリストが、地上にある教会の存在によって、聖霊によって、その現われが引き止められているのです。

そして興味深いのは、「塩気をなくしたら、役に立たない」ということです。イエス様は同じ事を異なる喩えで話されましたが、ぶどうの枝はぶどうの幹についていなければ、火で焼かれる燃料にしかない、ということを言われました。私たちはしばしば、「もう少し、この世的になったほうがよいのではないか。」と感じることがあります。この世にあるものを取り寄せることによって、それでこの世の人が教会にも来てくれるのではないか、と思います。いいえ、この世ははるか先を進んでいます。自分が最新のこの世の情報を得ていると思っても、すでに十年、二十年は時代遅れなのです。ですから、この世から捨てられるのです。

どんなに愚直に思えても、時代遅れに思えても、この地上にはないものが教会にあるのです。だから、どのようにださく見えても、やはり人は教会に来るのです。

2B 世の光 14-16

14 あなたがたは、世の光です。山の上にある町は隠れることができません。15 また、明かりをともして柀の下に置いたりしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。

旧約預言の中には、イスラエルが世界の光であることが宣言されています。そこでキリストにしたがう弟子たちこそが、そのイスラエルの使命を果たせることを教えておられます。

地の塩が、この世にあるものを取り寄せることによって塩気をなくしてはいけないという消極面を話している一方で、世の光は、この世に出て行かず内にこもっていることによって、その役割を果たしていない積極面を話しています。たとえの一つは、「山の上にある町」です。日本では木が生い茂っていて、想像ができないかもしれませんが、イスラエルは岩山が多く、木も背が高くなく、まばらなのではっきりと遠くから認めることができます。もう一つの例えは「燭台の上に置くあかり」です。もちろん、それは外に光らせるためです。

私たちが、迫害されることを恐れて隠してしまうことのないように、言われています。自分たちの中でもってはいけない、世に対して自分たちの光を輝かせる必要性について話しておられます。

ここで大事なのは、そのようにして「天におられるあなたがたの父をあがめるようになる」ということです。つまり、自分で何をしてはいけないのです。世の光であるとイエス様はご自身のことを言われましたが、世の光であられるイエスご自身から聞いているならば、自ずと自分たちを通して、神をあがめるようになるのです。